

次代を担う子どもたちのために

県教育庁高校教育課長

中 村 正 芳



長引くコロナ禍にあっても、誰かのために頑張っている人たちがいる。その姿を目にすると、いつも胸が熱くなる。県立高校の生徒たちも、福祉施設等に自作の消毒液や手作りマスクを届けるなど、その時々でできることを考え行動した。臨時休業で自分たちの学習にも影響が出ていた中で、他の人のために行動した生徒たちの姿に心を打たれた。

助けた人から感謝され、自分も幸せになる、見ていた周りも幸せな気持ちになる。誰かのための行動は多くの人を幸せにする。きっと生徒たちはそれを実感したことだろう。

自分のことを振り返ってみる。自分がしたことへの「ありがとう」の言葉はうれしいものだ。仕事でも、生徒や学校のために本当に必要なことであれば無理を言うこともあるが、そうした想いを察し、声をかけてくれる現場の先生の言葉には救われる。少々前のことにはなるが、教師として学び舎を巣立つ教え子たちからもらった感謝の言葉は、今でも昨日のことのように思い出され、そのたびに幸せな気持ちになる。人が一番幸せだと感じるのは、自分が人の役に立てていることを実感できたときなのかもしれない。仕事のやりがいも、まさにそこにある。

高校のキャリア教育については思うところがある。今日のような予測困難な時代にあつては、単に、就きたい職業へのアプローチだけで終わらせてはいけない。将来自分はどういう生き方・在り方をしたいか、個性を生かしどのように社会に貢献できるのかをしつかり考えさせたい。そして、自分のやりたことが、社会の中で誰かの役に立ち、そのことが自己有用感にもつながることを実感させたい。

そのためには、高校の学びも変わる必要がある。総合的な探究の時間では、社会の中で自分の個性や力が発揮できるところを探れるようテーマを設定し、他者と協働しながら学びを進め、最終的には探究したことを実践し、実社会からの評価を受ける場面を設けることが大切だ。キャリア教育や社会貢献活動と一体的に進めたい。実社会からの評価は、生徒のその後の人生の大きな糧となるはずだ。

次代を担う子どもたちが、これからの社会をつくる当事者として活躍できるよう、学びの転換は待ったなしである。そのための努力は、教師や学校、教育委員会にとって、まさに「やりがい」に他ならないと思っている。